3回生は12月の着手発表会を終えて、本格的な就職活動に突入した。4回生は1月末の卒業論文の提出と2月初めの卒論審査会を経て、37名が卒業することになった。データを集めるために調査すること、調査結果を分析すること、論文を執筆することだけでなく、大人数を前にして発表して質疑応答ができること、審査コメントを受けて論文をよりよくするために文章を修正できること、のいずれもが社会人の基礎力として役立つであろう。

ここ数年、学科事務員の変動があり、教員の異動も多く、学科業務が混乱することもあった。今年度は事務員の増田さんが、年間スケジュールを把握された上で、1年を通じて勤務していただいたので、滞りなく学科業務を遂行できたと思う。学部長控室のスタッフの皆様とともに、学科スタッフの増田さんには日頃からの学生と教員への支援に感謝したい。

環境建築デザイン学科のこの一年

村上　修一
環境建築デザイン学科長

教員メンバーについては、昨年度に引き続き、今年度も変化のない一年であった。欠員となっていた1名については、下半期、公募による選考が順調に進み、来年度4月より新たなメンバーを迎えることとなった。しばらくこの体制が続くことになるであろう。学科内に昨年度立ち上げた「カリキュラム検討委員会」では、必要な講義科目を精査するとともに、3回生後期に選択科目として「設計演習4」を新設することを決め、実践教育の充実を図ったところである。

今年度の卒業研究では、15名の学生が論文を、32名が制作を行った。最終の発表会では、5名のゲスト講評者をお招きし、熱のこもった議論が交わされた。今年度は、論文、制作ともに、底上げのなされた感があった。「目的から結論に至るまでの論証性に優れ、かつ、環境建築デザインの新たな知見を得ており、社会に対するインパクトを有する研究（作品）をEA賞として選定する」こととなっているが、相当数がこの選定根拠に合致するのではないかと思わせるほどであった。なお、ゲスト講評者の一人、大井鉄也氏は本学科の卒業生である。昨年度に引き続き、新進気鋭の建築家として卒業生をお迎えできたことは喜ばしい。

また、「木の上設計グランプリ2018」準優勝をはじめ、設計競技等における学生作品の受賞、教員による実施設計作品等の雑誌掲載、教員が主導する研究室プロジェクトによる基本設計等のメディア発表、地域における制作活動・展示活動・ワークショップの実施など、今年度も、教員や学生の学外における多方面の活躍が見られた。「地域に根差し、世界に拓く」という本学科の特徴は、今年度も確実に受け継がれ、確かなものとなっているようである。

生物資源管理学科のこの一年

泉　泰弘
生物資源管理学科長

学部長裁量経費を使わせていただき、学科ホームページのリニューアルを行った。ウェブ作成業者との話し合いにより、まず本学科の学生を対象に現行ホームページの印象についてのアンケートを実施し、その結果を受けて「学科の顔」ともいえるトップページのデザインを中心に刷新することとなった。新トップページ、および追加したサブページは魅力的なものに仕上がったと考えるが、中身の充実にまで十分手が回らなかったのは心残りである。

７月21・22日のオープンキャンパスでは「学科長が語る生物資源管理学科の魅力」というメニューが新たに加わり、来場者に向けて１日３回×２日の計６回話をすることになった。同じ内容を何度も繰り返すというのは思ったよりも難しいことであったが、回数をこなす内に要領が分かってきてアドリブも入れられるようになり楽しかった。来年度はもっと興味を引くような中身にしたい。もちろん私以外の学科教員にも展示・体験コーナー、圃場見学ツアーなど魅力的なメニューを提供していただいた。（ただし、両日とも猛暑の影響で午後の参加者が激減していたことから、とくに屋外でのイベントは時間帯の変更を考えるべきかもしれない。）

このような試みにどれほどの効果があったのか定かではないものの、2019年度入学試験（一般選抜）の志願倍率は前期日程が前年度の2.2倍から2.6倍、後期日程が同じく10.3倍から13.3倍へとともに増加した。とくに2018年度は全学部全学科を通しての最低かつ唯一の３倍未満であった前期の倍率が改善したことに安堵した。しかしながら、冷静に見ればブービーメーカーがブービーになっただけのことであるし、３倍に達していないことは一緒。とりあえずそこからの脱却を目指すべく、高校訪問は学部としての割り当て数をこなすにとどまらず、機会があれば足を運ぶなど、より積極的にアピールを行っていく必要を感じている。

全国農学系学部長会議（春および秋）、その東海・